様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：３２６２０
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009～2013
課題番号：２１５９０５７９

研究課題名（和文）日本の医療史における社会の転換と医療技術の連続性の研究

研究課題名（英文）The continuations of medical philosophy and technology in changing social system of modern Japan.

研究代表者
渡部　幹夫（Watanabe, Mikio）

順天堂大学・医療看護学部・教授

研究者番号：００１３８２８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,500,000円、（間接経費）　1,050,000円

研究成果の概要（和文）：　鎖国の江戸、明治維新、第二次世界大戦敗戦と日本の近代化は特殊である。この社会に生きた人々を支えた医療者は政治制度と社会の転換の中で混乱を伴いながらも、医療技術の継承と発展を担ってきた。それを可能としたものは出自や教育制度にかかわらず、教養を尊ぶ思想であった。東アジアの辺縁にある国民に儒学的ものがあったことは医療史のうえでは大きい。キリスト教文化圏の欧米の人が日本で蒐集した資料の中に医学的なものは必ずしも多くはないが、文化の異質性と、その技術に注目して集められたものとして価値がある。日本の技術の連続性の延長上に発展した医療技術の光と影の部分が国内と国外にある資料の比較により一部明らかにできた。

研究成果の概要（英文）：The national isolation of Edo, the Meiji Restoration, the defeat in World War II, and the modernization of Japan are distinctive events. The medical personnel, who supported the people living during these social eras, shouldered responsibility for the continuation and development of medical technology despite the accompanying confusion in the changing society and political systems. Progress was possible because of a philosophy that respected culture regardless of ancestry or education system. Furthermore, the presence of Confucianism among Japanese citizens was a significant feature in medical history. For Westerners belonging to a Christian culture, the medical material collected in Japan may not be much; however, it is valuable in terms of cultural heterogeneity and technology. A comparison of data in Japan and abroad partly clarifies the advantages and disadvantages of medical technology developed as a part of the extended continuation of Japanese technology.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：境界医学・医療社会学

キーワード：医史学　医療史　科学技術史　文化交流史　健康転換　蘭学　ドイツ医学　GHQ

１．研究開始当初の背景

(1)日本の近現代史は明治維新と第二次世界大戦敗戦という二つの政治的な転換を経験している。それに伴う社会の価値観や倫理観の変化も革命的といえる変化を経験した。その社会に生きる国民の生命を預かってきた医学についての史的な研究は日本医史学会が続けてきた。しかしその研究の課題は多くが東洋医学の日本での発展と西洋医学の受容史に重きが置かれてきた。日本の医学思潮が明治維新において漢方・蘭学からドイツ医学へ変わり、第二次大戦後にはアメリカ医学へ大きく変わったことについて、その変換期についての医学界の混乱を伴った変化についての研究は多いが、それをになった医療者やその対象となった国民の医療に対する感覚は必ずしも大きな変化として意識されていないのではないかと考えたのが本研究の背景である。

（2）課題名に医学史の代わりに医療史を用い、医療技術の連続性という言葉を使った理由は，学問としてある医学ではなく、その受け手である国民の感覚に切り込んだ研究を志向したためである。政治や行政の仕組みの革命的な変化にはその資料の散逸や意識的な処分を伴うことが当然あった。したがって、国内にて発掘できる一次資料は政治的に統制された行政資料以外には乏しい現況があった。むしろ日本を研究の対象とした世界の研究者等が日本から持ち出して保存しているものに学術的には興味深いものが多いのではないかと考えた。世界の最長寿国となった日本の医療史は日本の学界や社会が評価しているよりも世界での評価の方が高い。このことが成し遂げられた理由は日本の医療技術の連続性とそれを担った医療者にあるのではないかと考え、それを国外にある資料を含めて検証したいと考えた。

２．研究の目的

(1)いわゆる鎖国下の日本において、漢方医学の系譜から蘭学・蘭方医が出現し、明治維新後にはドイツ医学を全面的にとりいれた。日本の医学界は第二次世界大戦後にはアメリカ医学を積極的に学んだ。近代化において政治的には世界の先進国から遅れた日本が近代自然科学の偉大な成果である近代医学を国民のものにするためにはたした医療者と社会の仕組みの変化と連続性を明らかにすることを目的とした。

（2）地理的に日本は東アジアの辺縁であり、ヨーロッパからは極東である。近代以降、世界史上その存在が大きくなったアメリカ合衆国とは太平洋を隔ててある。日本文化の特殊性は、江戸期にいわゆる鎖国下でオランダ、朝鮮王朝、清国との交流を除いてなかったことによりかたちつくられたものであるが、ヨーロッパの日本に対する関心は常に高かった。ジャポニズムとして日本文化がもてはやされた時代に、日本の社会の医療はどのようなかたちで捉えられていたのかを明らかにすることを目的とした。

(3)明治維新後急速な近代化を急いだ日本は、日中１５年戦争から第二次世界大戦参戦、太平洋戦争の敗戦という歴史を歩んだ。その時代にドイツ医学を学んで発展した日本の医学は、世界的には欧米との連携が不十分な形ですすみ、敗戦後にはアメリカ医学追従のかたちをとった。医学において大きな位置を占める軍事医学の日本における資料は体系的には敗戦により失われている。むしろ、日本を占領した連合国軍（ＧＨＱ）が蒐集して残した資料によりわかることが多い。その資料から現在の日本の医療問題を解く手がかりを得ることを目的とした。

３．研究の方法

(1)出版されている研究書および文献を主体に研究を進めたが、国内の次の機関で直接資

料を調査した。
国立国会図書館憲政資料室、東京都立中央図書館、国際日本文化研究センター、東京大学図書館、東洋文庫、吉田富三記念館
（2）日米および日欧の交流史を、国外に保存される日本の古医史料から調査するために次の機関を調査した。
イェール大学ハーベイ・クッシング医学図書館、プリンストン大学東アジア図書館、ペンシルバニア大学医学系図書館、ジョンスホプキンス大学医学史図書館、ライデン大学図書館、ヴェルツブルグ・シーボルト記念館、シャリテ大学医学史博物館、ベルリン森鴎外記念館
（3）第二次世界大戦期の戦前・戦中・戦後に日本情報を蒐集したワシントンドキュメントセンターおよびＧＨＱが検閲した医学関係資料を調査するために次の機関を３回にわたり調査した。
アメリカ合衆国議会図書館、メリーランド大学ホーンバック図書館ゴードン・プランゲ文庫
（4）それぞれの調査において得られた資料を研究課題（時代の転換と技術の連続）でまとめるために整理した。

４．研究成果
(1)江戸期の蘭学者の多くは、その医学的教養を最初は漢方医として学んでいたことが多い。薬師として本草学の知識を持ち、哲学としては儒学的素養を身につけていた。
(2)実学としての西洋医学に瞠目した医家が長崎経由で届いた蘭学に強く魅力を感じたのは自然である。
(3)オランダ商館医官として来日したドイツ人医師シーボルトのもたらした医学的知識を日本人医家が貪欲に吸収した素地はすでにあった。
(4)シーボルトが医官として日本での診療・教育に果たした事績は大きいが、博物学者として日本の民族学的資料の蒐集を行い、ヨーロッパでの日本学の発展に果たした功績がむしろおおきい。ヨーロッパの各地に残るシーボルト蒐集資料の価値は高い。
(5)明治維新後、日本の医制としてドイツ医学を範としたことにより、西洋医学の最先端の知識と技術を導入したが、そのことは江戸時代から存在した医学教育の多様性を失わせた。
(6)明治期に多様な出自と教育歴を持っていた医師たちから、漢方医が排斥され大日本医会と明治医会の対立などを経ながら大日本医師会に集約され、健康保険制度の始まりを迎えた背景の政治史的評価は今後の課題である。
(7)ドイツ医学を先達とした日本が第一次世界大戦ではドイツの敵対国となり学術的な交流も減り、日本独自の医学研究に自信を持つようになったが、世界的なリセッション、関東大震災、その後の１５年戦争、太平洋戦争・第二次世界大戦期に、インフラとしての日本の医療は軍事医学を除いて極度に疲弊した。
(8)戦時中に獲得された健康政策の一部を含める医学的な学智と人材が戦後に日本の復興に寄与したことは多い。
(9)戦前・戦中・戦後の日本の資料を蒐集したワシントン・ドキュメント・センターの膨大な資料が保存されているアメリカ合衆国議会図書館の資料は明治期に朝河貫一が将来した日本古典籍とともに、日本の医療史研究にとり貴重な資料である。
(10)戦後占領期にすべてのメディアの検閲を行ったＧＨＱ／ＳＣＡＰが収集した日本の出版物はメリーランド大学ホーンバック図書館ゴードン・プランゲ文庫として整理され研究者に提供されている。占領下から日本社会が世界の政治経済の舞台に再登場する過程までの社会学的研究としてプランゲ文庫研究の価値は大きいと考える。

(11)公衆衛生局を率いたサムス准将の日本の社会医学領域における功績は大きく評価されている。医学教育制度を大学に一元化したことや、看護教育の近代化など評価されるべきことが多い。GHQ／SCAP の資料は国立国会図書館憲政資料室にて副本のマイクロフィッシュコピーを得ることができる。占領下の政策の評価は時代により変わる可能性があるが歴史的資料としての利用価値は高い。
(12)国内・国外の資料を調査して気づいたことは日本の医療者は伝統的には技術者としてよりも教養者としての相貌を見せていることである。時代の先端技術者としてよりも教養人としての果たしてきた医療者の歴史のほうが時代を超えて残っている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 13 件）

1）渡部幹夫：アメリカの医学図書館に所蔵される日本の医書について、医療看護研究　、査読あり、１０（２）、１－１２，２０１４
http://www.nurs.juntendo.ac.jp/library/pdf/kango_kenkyu10.pdf

2）渡部幹夫、福田洋、田中誠二　：派遣労働者の労働災害発生状況の推移について、医療看護研究、査読あり、7 (1)、１－９、２０１１
http://www.nurs.juntendo.ac.jp/library/pdf/kango_kenkyu07.pdf

3）渡部幹夫：Yale　大学 Harvey Cushing 医学図書館 Fry Collection に収蔵されている江戸期日本の医療版画資料について、医療看護研究、査読あり、６（１）、１０－２０、２０１０
http://www.nurs.juntendo.ac.jp/library/pdf/kango_kenkyu06.pdf

4）　渡部幹夫：日本のワクチン受容史－ジェンナー博物館にて予防接種法を考える、日本医史学雑誌、抄録、５６（１）、９５－９６、２０１０

5）渡部幹夫：テレビドラマの中の病院（前編）　米国ドラマ『ER』 と韓国版『白い巨塔』・台湾ドラマ『ザ・ホスピタル』、病院、査読なし、６９（５）、３６８－３７１、２０１０

6）渡部幹夫：テレビドラマの中の病院（後編）　米国ドラマ『ER』 と韓国版『白い巨塔』・台湾ドラマ『ザ・ホスピタル』、病院、査読なし、６９（６）、４６０－４６３、２０１０

7)渡部幹夫：巻頭言　多民族国家アメリカの蔵書史と Health and Human Ecology、民族衛生、査読あり、７５（３）、７７－７８、２００９

〔学会発表〕（計 24 件）

1）渡部幹夫　：　日本近代医学の祖となったヨーロッパ医学－英国、オランダ、ドイツの医史跡と博物館で考えたこと－、順天堂大学医療看護学部教授退任講演会、順天堂大学医療看護学部、平成２６年３月７日

2）渡部幹夫：Leiden　大学に所蔵されるレメリン解剖学書２書と『和蘭全躯内外分合図』について、第１１４回日本医史学会総会、日本歯科大学生命歯学部、平成２５年５月１１日

3）渡部幹夫：日本の予防接種法の歴史的問題について、第７８回日本民族衛生学会総会、佐賀大学、平成２５年１１月１６日

4）渡部幹夫：昭和２２年刊「公衆衛生叢書全７輯」について、第１１３回日本医史学会総会、獨協医科大学、平成２４年６月１６日

5）渡部幹夫：大正１１年制定の健康保険法とその施行の遅延について、第７７回日本民族衛生学会総会　東京大学山上会館、平

成２４年１１月１６日
6）渡部幹夫：大正１１年制定、昭和２年施行の健康保険法についての１考察－関東大震災と医療体制史を含めて、日本医史学会平成２４年１１月例会（招請）、順天堂大学１１号館、平成２４年１１月２４日
7）渡部幹夫：結核実態調査の戦後史における検討、日本医史学会平成２３年４月例会（招請）、順天堂大学、平成２３年４月２３日
8）渡部幹夫：井口乗海著「種痘及種痘論」による２０世紀初頭の各国と日本の種痘法規について、
第１１２回日本医史学会総会、順天堂大学、平成２３年6月１１日
9）渡部幹夫：終戦後の種痘に関するＳＣＡＰＩＮ文書と日本の対応に関する一考察、第７６回日本民族衛生学会総会、福岡大学、平成２３年１１月２３日
10）渡部幹夫（招待講演）：結核統計総覧と結核実態調査に見る日本の結核史、
結核文化研究会（奈良女子大学　鈴木則子主宰）、東京都湯島ガーデンパレス、
平成２２年5月２２日
11）渡部幹夫：日本の結核史における第二次世界大戦とＢＣＧ研究について、
第 111 回日本医史学会　総会、茨城県茨城大学、平成２２年6月１２日
12）渡部幹夫（招待講演）：15 年戦争と結核研究　日本のＢＣＧ研究、
科研「近現代の日本における医療の構造変化と歴史の重層」報告会（慶應大学　鈴木晃仁　主宰）、大阪大学豊中キャンパス、
平成２２年9月１１日
13）渡部幹夫・福田洋・田中誠二：
派遣労働者の労働災害の変化について－近年の派遣労働統計値と労災統計値からの考察－、第 75 回日本民族衛生学会総会、北海道大学、平成２２年9月２５日
14）渡部幹夫：　特別発言
日本のワクチン受容史－ジェンナー博物館にて予防接種法を考える、第３回　浦安小児医療懇話会、浦安ブライトンホテル、平成２２年3月２４日
15）渡部幹夫：　Yale 大学 Cushing 図書館 Fry Collection の漢方刷り物について、第１１０回　日本医史学会総会、佐賀市、２００９年6月7日
16）Mikio Watanabe：Research History of Electricity and Electric Treatment in Edo ,Japan.
Princeton University East Asian Studies Program Event , Japanese Medical Books of Tokugawa-Meiji Era , Princeton University New Jersey USA, 2009/9/21
（渡部幹夫：日本の医学史料と電気療法史）
17）渡部幹夫，福田洋，田中誠二：
労働災害の推移と労働安全・労働衛生スローガンの変遷、第７４回　日本民族衛生学会総会、　平成２１年１１月１３日
18）渡部幹夫：日本のワクチン受容史－ジェンナー博物館にて予防接種法を考える、日本医史学会・日本歯科医史学会・日本薬史学会・日本獣医史学会・日本看護歴史学会合同例会、順天堂大学医学部、平成２１年１２月１２日

〔図書〕（計 2 件）
1)渡部幹夫：研究成果報告書（　中間報告　）日本の医療史における社会の転換と医療技術の連続性の研究、基盤研究（C）
課題番号２１５９０５７９、１３０頁、
研究代表者　渡部幹夫、
発行所　順天堂大学医療看護学部
平成２４年３月発行
2)渡部幹夫：科学研究費補助金
研究論文集　「医療史から見た戦後期の予防接種法と結核予防法の研究」平成１７年度～平成２０年度科学研究費補助金（基盤

研究（C）研究課題番号１７５９０４５９
「日本の医療史における社会の転換と医療技術の連続性の研究」
平成２１年度　科学研究費補助金　（基盤研究（C））研究課題番号２１５９０５７９
研究成果報告書　総ページ数１０５頁
研究代表者　渡部幹夫、　発行所　順天堂大学医療看護学部、平成２２年３月発行

〔その他〕
書評（４件）
1）渡部幹夫　：　（書評）　横田陽子　著『技術から見た日本衛生行政史』、日本医史学雑誌　５９（１）、１０９－１１０、２０１３
2）渡部幹夫　：（書評）　多賀須幸男　著『医師たちの跫音－日本医家の苦労話－』、日本医史学雑誌　５９（３）、４５８－４５９、２０１３
3）渡部幹夫：（書評）小川浩司著　『近代医学を切り拓いた人々』上巻　下巻、東京医学社、日本医史学雑誌、　５６（４）　、５５４-５５５、２０１０
4）渡部幹夫：（書評）杉田米行編　『日米の医療－制度と倫理－』　大阪大学出版会、日本医史学雑誌、　５５（３）、３９５－３９６、２００９

記事（１件）
1）渡部幹夫：　（ＴＢアーカイブ記事）
印西市立印旛医科器械歴史資料館を訪ねて、複十字（結核予防会）、Ｎｏ．３５２　、２２－２３、２０１３

６．研究組織
(1)研究代表者
渡部　幹夫（WATANABE, Mikio）
順天堂大学・医療看護学部・教授
研究者番号：１０２３４５６７